

「相手意識」について考える 資料編

「小学校学習指導要領解説 国語編」の検討

第2節 内容の概説

1 「2 内容」についての概説 では、

「A 話すこと・聞くこと」の「ア 話すことに関する指導事項」で、
第1学年及び第2学年では、「・・・、相手に分かるように話す」
第3学年及び第4学年では、「・・・、相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話す」
と記述されている。また、

「B 書くこと」(P17)

各学年の「書くこと」の内容は、

ア 目的意識・**相手意識**、自分の考えに関する
指導事項

イ 取材に関する指導事項

ウ 構成に関する指導事項

エ 記述に関する指導事項

オ 推敲・評価に関する指導事項

で構成されている。

と記述されており、国語科では、主に「話すこと」で、相手に応じて（特に言葉遣いや敬語が中心か）を意識すること、そして「書くこと」の内容として「相手意識」を指導することになっている。

「まとめて（書いて）伝える」活動の中で、相手意識が大切になってくるということであろうか。

「相手意識」が出てくる回数は、11回

第1章「総説」	・・・	0回
第2章「各学年の目標及び内容」	・・・	2回
第3章「各領域の目標と内容」		
第1節〔第1学年及び第2学年〕	・・・	1回
第2節〔第3学年及び第4学年〕	・・・	7回
第3節〔第5学年及び第6学年〕	・・・	1回
第4章「指導計画の作成と内容の取り扱い」	・・・	0回

第3学年及び第4学年の部分の記述に圧倒的に多い。
「相手や目的に応じ・・・」、「相手や目的を意識して・・・」
という記述は、第1学年及び第2学年にも多い。



低学年では、伝える相手が、家族やクラスの友達であることが多く、「どんな人か」ということは、分かり切っているので、意識して調べようとする必要があまりないのではないか。

中学年の段階では、交流校の友達や、地域の特定の誰かが伝える相手となり、「どんな人か」を調べて、伝え方の工夫をするという活動がしやすいのではないか。

高学年になると、「地域の人」「インターネットを使ってみんなに」というように、伝える相手が不特定な多数に広がる傾向があるため、「相手を意識すること」が難しくなるのではないか。

MEMO

ア 目的意識・相手意識、自分の考えに関する指導事項 (p17)

すべての指導事項において、相手意識・目的意識と自分の考えをもつことを念頭に置きながら・・・ (p17)

アの事項は、相手意識や目的意識をもつことについての内容である。 (p32)

聞き手も相手意識や目的意識をもちながら聞く必要がある。 (p63)

その際、相手意識や目的意識をより明確にもって書こうとする態度を育てることが・・・ (p68)

第3学年及び第4学年では、相手意識や目的意識をより明確にもち、それらに応じて書く能力や・・・ (p69)

「適切に書く」ためには、相手意識や目的意識をもち、記述の際だけでなく、書く材料の・・・ (p69)

身近な人々が読者であるため、相手意識も具体的に持つことができる。 (p75)

また、相手意識や目的意識をもちながら、言語事項(1)のア「・・・」と関連付けるとともに (p81)

相手意識がはっきりした場の状況や目的を意識することができるようになる第3学年及び・・・ (p84)

聞き手も相手意識や目的意識を高めながら聞く必要がある。 (p98)